

メッセージ

被災地からのメッセージ

全国の皆さまへ

あいコープみやぎ・事業部 供給チーム 宮城野・若林・しおさい・石巻地区

エリアリーダー 庄子 裕章さん

庄子さんは入協7年目の職員。宮城野・若林・しおさい・石巻地区のエリアリーダーとして6人のチーム員を束ねます。庄子さんは震災直後、行方不明になった家族を探すためしばらく業務から離れざるを得ませんでした。当時の様子や現在の支援活動について話していただきました。



あいコープみやぎ・庄子 裕章さん。

●自分には体験者。忘れてはいけな**い**と思っ**て**います

―震災が起きた3月11日のことを教えてください。

午後2時頃に配送を終え、センターの近くで昼食を取っている最中に地震が発生しました。最初は強風でトラックが揺れているのかと思ったのですが、次第に揺れが激しくなつたので、地震と気付きトラックから出ました。目に入る

風景が全部揺れて道路の継ぎ目が割れるのが一目で分かりました。嫁さんと子どもが気になったのですぐに電話をしましたが、その時はつながりませんでした。

センターに戻り、ラジオなどで情報を得ながら配達に出ているチーム員の連絡を待ちました。1人だけ連絡がつかない職員がいましたが、自分も家族の状況が分からないので帰宅することにしました。ところが大渋滞で1時間かかっても少ししか進みません。そこでまたセンターに戻りました。

自宅は多賀城市の内陸にありません。嫁さんとは夕方ようやく連絡が取れて、お互いに無事を確認できました。しかし実家は仙台市若林区の、海から1.5kmほど離れたところにあつたので、そちらが心配でした。実家には親父とお袋、妹2人の4人が暮らしていました。夜、職場にいた親父と電話がつながり、「お袋たちは大丈夫か」と聞くと、「連絡取れた。みんな伯母さんの家に避難すると言っていた」と。それで、とりあえず大丈夫だろうと

気持ちを落ち着かせました。

―翌日は自宅に戻れたのですか。

センターでは土曜日、茨城まで青果を集荷しに行くことになっていました。担当の職員が行けないということで、私ともう一人の職員が急遽向かうことになりました。

「お前、お袋さんたちとは連絡取れたのか」と上司に聞かれたのですが、その時点ではまだ直接の連絡は取れていません。「まだです」と伝えたら「じゃあ、お前行かなくていいよ」と……。ただ一緒に行く予定の人は昔からよく知っている先輩で、1人で行かせるわけにはいきません。それに、自分たちが取りに行かないと、被災して困っている組合員さんに商品を供給できないという思いもありました。

翌日朝5時頃にセンターを出発しました。高速道路は使えなかつたので、4号線を南下しました。信号は点いておらず、道の片側が

崩れているような状態のなか緊張

しながら運転しました。上司からは「当日中に帰れないと判断したら戻ってきていい」との指示をもらっていました。案の定、8時間ぐらいかかっても福島までしか入れず、一緒に行った先輩と相談して、仕方なくそこで折り返すことにしました。茨城の取引先は出荷できる体制で待っていてくれたようなのですが、電話して「今日は行けません」と伝えました。

帰る途中でいところから電話が入りました。実はいとこの息子もうちのお袋たちと一緒にいたんですね。「伯母さんの家に行くご連絡あったようなんですけど、まだ誰も来てない」という内容でした。いや大丈夫だ、生きているはずだ、信じようと、そう自分に言い聞かせながら、でも気持ちが定まらない感じでした。

帰りも時間がかかり、センターに戻ったのは夜中の10時半でした。車のガソリンがなかったので、伯母さんの家まで先輩に送ってもらい、そこで嫁さんと子どもに会

うことができました。

——多くの人が家族と連絡が取れず、安否確認に時間がかかりました。

はい、そのとおりです。その次の日……日曜日の朝でしたが、センターに職員全員が集まって、それぞれの家族を含む安否確認を行ないました。お袋たちの安否がまだ分からないと伝えると「今日は帰っていいから」と言われました。そこからです、避難所回りを始めたのは。自分といところ、親父と親戚の二手に分かれ、避難所になっている中学校や小学校を探し歩きました。が、避難者名簿を見ても求めている名前はありません。

するといとこが、うちの実家の隣りに住むおじさんと偶然会って話を聞いてきたんですね。

おじさんは震災の時はお袋や妹たちと一緒にいたそうです。そして「近所の人たちと一緒に流されてしまった、お前のお袋や妹たち

は難しいだろう」と……。いとこは自分の息子も一緒に流されたこと知って取り乱して……。

運が良ければ自衛隊に助けてもらっているかもしれないと一縷の望みを抱いて自衛隊のテントに確かめに行きました。病院に搬送されているかもしれないと思って病院を全部回りました。

しかしどこの名簿にも名前がない。覚悟しないといけないと思いました。同時にここで自分が折れてはダメだと強く意識しました。親父やいとこは望みを捨てずにいながらも元気を無くしていきました。自分が折れたらいとも親父も折れてしまう。そんな気がしたんです。

早く見つけてあげたいと思い、家の周りを探すことにしました。自衛隊や地元の消防団の人から波の流れなどの情報を得て、このあたりじゃないかと推測して歩きました。夕方まで探し回り、暗くなったら遺体安置所に行つて確認するという日々でした。

震災から1週間後ぐらいに実家から500mぐらいの場所で一番

下の妹を見つけてもらいました。お袋たちもみんな一緒に流されたということなので、そのあたりを探すようにしました。親戚も毎日探しに来てくれました。

次にいとこの息子が瓦礫がれきの中から見つかりました。見つけたのはいとこの父親で、つまりおじいさんが自分で自分の孫を見つけたんです。そこが周辺で一番瓦礫の量が多かったため、自衛隊や消防団にここを探索してほしいと願いました。

探している途中、「今日は何歳ぐらいの人が見つかったぞ」と聞くとすぐ行つて確かめました。そういう中でお袋とすぐ下の妹が見つかったんです。震災発生から約1カ月後ぐらいのことでした。

——職場に復帰されたのはいつですか。

完全復帰したのは、お葬式などが全部終わってからで、4月末でした。

家族を探している途中、職場が気になって電話をしました。「ど

うなんだ」と聞かれ、「毎日探しているのだから仕事を任せん」と言いました。

あいコープみやぎも大きな打撃を受ける中、仕事に参加できないのはとても申し訳なかつたのですが、自分にとっては家族を探してあげることが今一番やらなければならぬことだったので、そちらを優先させてもらいました。

職場の仲間はそんな自分のところへ電話をくれたり、おにぎりを届けてくれたりしました。当時はオムツやミルクなども不足していたので、まだ7カ月の息子のためにオムツを買ってきてくれたり、ミルクを集めてくれたりしました。組合員さんからオムツをもらったこともあります。

復帰した後で上司に言ったことがあるんです。「あのときは、クビになつてもいいから家族を探そう、職場が一番大変なときに居られないんで、どうなつても仕方がないと思つていました」と。上司からは「いや、それはないよ」と言われましたが、でも本当にあのときは、そ

れが正直な気持ちだつたんです。

配達は3月末から再開していましたが、20品目ぐらいのリストからその場で注文を受けてくるような状況だつたそうです。

4月以降は、直後に連絡の取れなかつた組合員さんと連絡を取りながら、通常の配達業務を行ないました。でも家は無くなつていて、道は狭くてぼこぼこに隆起していて大変でした。

石巻市に行くところも多くの犠牲者がいるので、やはりそういう話になるんですね。「お互い大変だつたね。頑張ろうね」と励まし合うことが度々ありました。自分の事情を知っている組合員さんからは「あんたは生かされたんだから、これから頑張つていかないとダメだからね」と言われました。

●家族や職場の仲間の支えがあつたから頑張ることができました

——あいコープみやぎさんが取り組まれている被災者支援活動について教えてください。

震災直後はパルシステムグループ[※]の皆さんが泊まり込みでこちらに来ていたので、連携して支援活動を進めました。最初はやはり炊き出しと支援物資のお届けです。3月末から4カ月間、週2回、毎回10数人のチームで動きまわりました。石巻地区はほとんどの避難所を訪問できたと思います。自分が最初に行ったのは石巻好文館^{こうぶんかん}高校の避難所で、すでに大きなボランティア団体が入っていました。食べ物を持っていったのですが、避難所の方々から逆に「うまいから食べていけ」と石巻焼きそばを振舞われました。

夏場は食中毒の心配もあつたので炊き出しは中断し、9月からまた再開しました。石巻は仮設住宅への入居が進み、避難所は閉鎖されていきました。自宅を修繕する人たちなどのために公民館などが待

機所になつていたので、今度はそちらに物資を支援しました。そのうち待機所も無くなつたのでその時点で炊き出し活動は中止にしました。

現在は石巻の地域サロンへの支援と、センターの近くにある仮設住宅への支援を中心に活動しています。

石巻の「よつてがいん」は被害の大きかつた渡波^{わたなは}地区にあります。高齢者や障がいを持つ人たちが気軽に集まれるようにと地元の人たちが中心になつて2012年9月にオープンした地域サロンで、あいコープみやぎは、食材提供や組合員同士の助け合いの仕組みを使って家事支援などを行なっています。

センター近くの仮設住宅には、同級生のお母さんなど、実家のあつた若林区岡田地区の人たちが住んでいます。先輩と話し合つて餅つきをやつたことがきっかけで支援することになりました。そのお母さんたちが震災後みんな集まつて「いのちの笛」という警笛をつくり、販売するようになっています。最近では手芸品を造つているので、あいコープみやぎのイベント

「Waわぁ祭り」でバザーを開催して販売を応援しようと思っています。

——全国の人に伝えたいことはありますか。

全国の生協の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。自分がここに今こうしていられるのは、周りの人に支えられたからだと思います。

職場の仲間からも本当にたくさん励まされました。彼らがいなければ、自分は頑張っただけで、みんな元気でいてくれたので、自分も元気でいようと思いました。自分が元気でいけば親父も元気でいるだろうし、親父が元気なら親父の周りの人も元気になるだろうと。本当に周りに恵まれたと思います。

そして何より家族に支えられました。正直、嫁さんと子どもがいなかったら……自分は多分、難しかったと思います。

一人ひとりが誰かに支えられて生きていくのだと思います。もし自分がお世話になった人がこれから大変なことになったとき、自分が支えられるようになりたいと思います。

(取材日2013年9月24日)

※ パルシステム連合会および同連合会の会員生協・関連会社。